

Life is so  
Precious!

仕事も人生も  
もっと楽しく! 美しく!

国内ではまだ新しい「腫瘍内科は、がん治療を内科的に行う診療科だ。これまで抗がん剤治療は、外科医が行うのが主流だった。しかし近年著しく進む新薬の開発などで複雑化し、その治療は薬物療法を専門とする腫瘍内科医の手に移ってきている。「聖路加国際病院」には、がん治療のスペシャリストが集結するオンコロジーセンターがあり、腫瘍内科医として働く中野さんは中心的な役割を担う。「私たち腫瘍内科医の仕事は、抗がん剤という体への影響が大きな薬に対して、患者さんにとってのリスクとベネフィットを天秤にかけ、最善の治療法を判断すること。もちろん標準治療にはガイドラインがありますが、それでも100人いたら100通りの治療があると思っています。なぜなら、人生で大事にしていることや本当の望みはひとりひとり違うから。『ハワイにもう一度行きたい』『娘の卒業式に出たい』など、どの方法ならそれを実現して、人生のクオリティを保ちながら治療を行えるのか。治療に長い期間がかかることの多いがんは、好むと好まざる

に関わらず医師と患者はお互いにとつてのキーパーソンとなるのです。数値化できる症状だけでなく、毎週話をしながら、ときには話しくい経済的な不安や家族の状況などに耳を傾けます」

中野さんは、大学卒業後アメリカで最先端の医療を学びたいとニューヨークで研修を受けた。ただ自身がどれだけ研鑽を積んでも所得の低い人たちはその医療を受けることができないシステムに疑問を感じ、帰国。その後は小笠原諸島の離島、父島診療所に派遣された経験もある。島の医師は中野さんだったひとり。内科も外科治療もこなし、赤ちゃんから高齢者まで診察した。アメリカでの最先端医療と島の診療所、大きな振り幅のある経験をして、腫瘍内科医として今の価値観ができあがった。

「父島では、がん患者の『内地での延命治療はせず、島で最期まで暮らしたい』という声も聞きました。最先端の西洋医学を使って延命することだけが、その人の最善ではないこともある。患者さんが何を恐れ、何を望むのかを見極め、最適な治療を行います」

Japan

Tokyo

## 最適な治療のため 患者の`人生、に 耳を傾ける腫瘍内科医

聖路加国際病院 腫瘍内科 副医長

中野絵里子さん

Eriko Nakano

### Profile

44歳。大学を卒業後アメリカの最先端医療を学ぶために「横須賀米海軍病院」「ニューヨーク大学ペルビューメディカルセンター」にて研修を行う。帰国後は都立病院などに勤務しその後、腫瘍内科医になるため「国立がん研究センター中央病院」へ。2010年より「聖路加国際病院」に勤務。3人の娘と夫の5人暮らし。



自らも乳がんを患いながら啓蒙活動を行う山吹祥子さんの制作したバッジをいつも胸に。

### ●世界各国キャリアへ、5つの質問

- Q1 仕事の成功のためにしている習慣は？  
通勤時にその日の治療のシミュレーションを行う。
- Q2 バッグに必ず入っているもの3つは？  
ID バッジ、絆創膏、手に触れず取り外し収納できるマスクシース。
- Q3 あなたの街のストレス解消スポットは？  
公園など子供が集まる場所。行く心がほぐれる。
- Q4 理想の週末の過ごし方は？  
昼は子供と遊び、夜は家族でドキュメンタリー鑑賞。
- Q5 人に言われてうれしいほめ言葉は？  
「オンコロジーセンターに来てよかった」とチームがほめられること。

